

皓臺寺に眠る渡辺庫輔さん夫妻

くらすけ

堀田 武弘

渡辺庫輔さんの奥さん渡辺よしさんの一周忌法要が去る六月七日、長崎の皓臺寺本堂で勤められた。『渡辺よし』さんが亡くなられたのは平成十九年六月、娘さんに看取られながら、長崎の地から遠く離れた千葉県市川市でなくなられた。九十二歳だった。

郷土史家として著名な渡辺庫輔さんは古賀二郎先生の第一の門下生であり、越中哲也先生の師でもあられる。渡辺庫輔さんが亡くなったのは昭和三十九年、この時、渡辺よしさんは庫輔さんが収集された長崎郷



薛、渡辺両氏の還暦祝
前列右から、林源吉・島田八郎・渡辺康輔、薛会長夫妻、崇福寺住職

土史の膨大な郷土史関係の資料や文書記録、刊本、写本、原稿等を、主に長崎県立図書館と長崎市立博物館に寄贈されている。

筆者と渡辺よしさんとの初めての出会いは二十余年以前である。平成二年十月、所用で上京した折、よしさんが住まわっていた千葉県白井町の自宅を訪ねた。当時筆者は長崎の歌人達を紹介する『長崎歌人伝』を執筆していた

が、大正時代、長崎で三年余りを過ごした著名な歌人・斎藤茂吉の門下生として歌を詠んでおられた渡辺庫輔さんの、長崎歌壇における活躍を、よし夫人からお聞きするためだった。

よし夫人の手元には長崎県立図書館に収められている『渡辺文庫』を越えるものは無かったが、それでも郷土史に關した貴重な資料が残っていた。その中には幕末長崎の歌人中島廣足、青木永章、近藤光輔等がしたためた数多くの短冊や、重ねると五十センチを越える膨大な量のしおり・引き札・案内状などで、よしさんは「これらの資料は長崎のもの、すべてを故郷に返すのが私の努め」と、段ボール箱四箱に詰め筆者に託された。

送られて来た箱詰めの資料を越中哲也先生と共に整理分類し、それぞれの寄贈先を決めた。長崎市立博物館には前記の短冊類等を、県立図書館には昭和二十九年に「去来二百五十年記念」として発刊された大著『向井去来』掲載の原稿を収めた。渡辺庫輔さんは「去来とその一族」と題した論文を三百ページ以上にわたり著しておられるが、その自筆原稿はきれいに製本され保存されていた。この原稿は「よしさん」として『お宝』だったらしく、いついつまでも手元に置きたい様子を話の端々に感じた。渡辺庫輔さんはこの著の「あとがき」に次のように記しておられる。「…それにつけてもおもふことは、恩師芥川龍之介、斎藤茂吉の二先生に、幽明境を異にした今日、これを一讀して貰へない哀しきである。幸ひに、古賀十二郎先生は健在である。虎皮下に呈して叱正を懇願したいと念じてゐる。産土諏訪神社は今日より祭禮に入る。庶くはわが文運に加護あらせ玉へ。」

と恩師古賀先生を讃える一文で締めくくっておられた。

そしてよしさんが最後まで手元に残されていたのが、郷土史家・渡辺庫輔さんの足跡を写した写真アルバムであった。このアルバムだけは生前の「よしさん」に「下さい」と言い出せなかったが、遺品を整理さ

風信

○九月二十八日・第三十三回長崎郷土芸能大会に行く。特に初出場の「高浜相撲行事」。そこには古式な素朴な土俵入り、弓取式等々と、一同われんばかりの大拍手。私も思わず涙してしまった。

○翌日、長崎市企画室の大申氏・伊達木女史来訪あり。来年は長崎市政二〇年となり、その「記念誌」を新しい構想で発刊する事になったので、編纂に協力して下さいとの事、勿論、承知いたしました。本の予定は上・中・下の三巻、各巻千ページ。発刊は四年先との事。

○長崎市立図書館より、昨年二月創立以来、図書館利用者も予想以上に多かったので「第一回長崎学講座」を十一月三日午後一時半より開催するので其の講師を私に御願いたしたいとの事。私は早速お引き受けすることにしました。それは、私が今まで先輩方よりお教え戴いた「長崎・文化の話」を皆様方にお伝えしておきたいと考えていたからである。(尚・当日は座席数の事もあり、参加希望者は市図書館に往復ハガキで予約して戴きたいとの事。会費不要)

○長崎日ボ協会恒例の研修旅行は「天草キリシタン史跡探訪を十一月八日(土)に予定した」ので参加希望者は日ボ協会事務局(十八銀行内長崎経済研究所)日ボ協会)又は本会事務局丹田まで御連絡下さいとの事。

○本会とNHK長崎文化センター共催の十一月史跡探訪は、丸山花街を中心に歩き、石橋家の御厚意で兒島高德ゆかりの秘佛・行滿院本尊を拝観、次に花月にて卓袱料理を戴くとの事。参加希望者はNHK長崎文化センター(電話八八・七〇二)まで。

○東京の荒木清氏より曾根綾子女史と二十六聖人記念館結城神父の対談集「愛のために死ねますか」を御惠送いただいた。対談は四つの章に分かれていた。対談第一は「日本人に欠けてしまったもの」とあった。其の中で私は「消えたコタツの文化」に心ひかれた。コタツは家族の始まりですと言われる。そして「スペインにも日本のコタツに似たものがありますよ」と神父は言われる。「全ての愛は家族の団欒から始まるのですね。お父様は仕事の自慢話、お母様は美人だった話、スペインも日本も同じですね(曾根)と言われている。(中経出版・二五〇〇円)

○ながさき経済十月号(十八銀行長崎経済研究所刊)の要約の欄に「景況感・悪化傾向続く」とあったが、目次・県内経済欄には「大手・中堅造船・重電機…電子部品共に高操業、県内大型小売店・県内旅行業者約半年ぶりにプラス」とあり、少し嬉しかった。

れた娘の山本紀子さんからこのほどアルバム六冊が届けられた。

このアルバムも越中先生と共に中身を確認したが、それは戦後の長崎文化史そのもので、長崎を訪れた文化人達と写った記念写真で占められていた。その中の一枚が昭和三十一年四月、日仏合作映画「忘れえぬ慕情」の長崎ロケで来崎された岸恵子との写真で、芥川龍之介描く「かっぱ屏風」を背にし二人は並んでおられるが、この頃が渡辺庫輔さんの郷土史家として最も油に乗っていた時ではなからうか。

地元出身の作家、佐田稲子、山本健吉等との写真。戦前では東中町の斎藤茂吉旧居跡で歌人・吉井勇と写った写真もあった。このアルバムは長崎県立図書館に収めることにした。筆者もこれで一安心である。

なお私事だが筆者は地元民報NBCで映像や音声の管理を行っているが、この頃、渡辺庫輔さんの生前のモノクロ映像を資料の中から探し出した。昭和三十四年に稲佐山歌碑建立で来崎した吉井勇を案内するシーン、同じ年の長崎国際文化会館でのNBCテレビ開局パーティ会場での着流し姿の庫輔さんなどである。

渡辺庫輔さんが没したのは昭和三十九年六月十五日、六十二歳だった。この時「長崎新聞」主筆松浦直治氏が追悼記事を次のように掲載しておられる。

『長崎学』というのには現代には数少ない文化的価値を持つ一つの郷土の学問である。その学問が中央の文化人から、文芸美術の使徒から尊敬に値し、研究の将来性を持つものとして重んぜられ、その中核体の師となるべき人はだれであったろうか。渡辺庫輔さんをおいて他に人がいるとは考えられない。『長崎坊ツちゃん』らしい寛濶な見かけの底に、しぶといほどの学究的意欲と敬虔といつてよいほどの芸術的求道心を持つて生まれたこの人が、あらゆる困難や辛苦とたたかいたが、ただ一途に『長崎学』への道をひた進んだことは、半ば好きの道であるとともに、半ばそうゆくべき宿命が支配したともいえる。』

筆者が生前「よしさん」から戴いた数冊の渡辺庫輔さんの著書、それには「風中書屋」の印が押されていた。「渡辺よしさん」の戒名は「本院院幸蘭善芳大姉」、渡辺庫輔さんは「本光院格外風中居士」、お二人は仲よく寺町の皓臺寺に眠られている。長崎人にとって忘れてはならないご夫婦である。

(NBCライブラリー部勤務 長崎史談会会員)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 二F

